

---

# アイツと俺は同じなアタシ！？

ルート・西

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アイツと俺は同じなアタシ!?

### 【Nコード】

N8017H

### 【作者名】

ルート・西

### 【あらすじ】

俺の人生はそんなに悪くない。平凡だけど幸せな人生だ。だが、そんな俺の人生に、世界に、アイツがやってきた。絶対に会おう事の無いアイツが……。俺は佐東暁くさとうあきら>そしてアイツは――――

## 最初に言っておく

俺の人生十七年に不満は無い。

「好きな食べ物」

「大事なな趣味」

「気の合う友人」

「好きな人」

全部俺の人生の宝！

うん、マジで今が楽しいよ。これ以上のもんは手に入らないてくらいにね。

・・・でもな、俺の人生の中に妙にでっかい時限爆弾みたいなもんが放り込まれてきたんだよ。

神のいたずら？ 運命のなんたら？

うん、出会っちゃたよ。本当なら会はずの無いアイツに。

## 一・（俺）の普通な日常

「ううん、ヤバイ」

俺は今、非常に辛い現状に立たされている。それは何かというと、実は二つの愛しいものが目の前にある。俺はいま、どちらかを選ばなければならぬ。

いや、まいったね。

運命てやつは残酷だよ。はあ、どちらを選べばいいんだい？　なあ、神様よ。

「暁、決まった？」

おや？　俺に話しかけるこの声は

「下和田！」

そう、下和田だ。俺の親友下和田　正義くしもわだ　まさよし＞俺の馬鹿に付き合う希少価値。それが下和田。

「なに、いきなり大声出して」

温和な口調でやんわりと笑う下和田。フフ、さすがは俺の親友。その笑顔は破壊力抜群だ。俺が女だったら惚れてるかもしれないよ下和田くん。

「お、そうだ！　微笑みの親友！」

ちようどいい、困った時の親友頼み。今日の俺のパートナーをこいつに決めてもらおう。俺はきつと後悔しないから！

「と、いうわけでお願いしまゝす」俺は下和田を愛しいものの前に立たせた。

「と、いうわけって言われてもなあ」

下和田ちよつと苦笑いを浮かべながらもジッと目の前の俺の愛しいものを見つめて考える。

「両方はダメなの？」　「ダメだそれは出来ない！　俺は、どちらかを選ばないとダメなんだ！」

「そんなものなの？」

ああ、俺は選ばなければならない。この

「健康的な辛口ギャル」か！

「麗しき白き肌のお嬢様」を！

クッ、どちらも魅力的だ！　だが俺には二人を解放するすべはない。選べるのはどちらかひとり・・・なんだ。

だから、俺は親友に決定権を託すのだ！頼むぞ下和田！

「じゃあ、麗しき白き肌のお嬢様で・・・いいのかな？」

「よしきた！」

遂に決は下された！

「・・・すまない」

俺はそっと

「健康的な辛口ギャル」に別れを告げ、

「麗しき白き肌のお嬢様」を手に、この世界の主の前に立つ。そして、声高らかに俺は叫ぶ！

「おばちゃん！」「特選！白クリームパン」を一つ！　お供はこの

「飲み物無料券」で

「田中さんのミルク」を！！「購買のおばちゃんの威勢の良い声と共に、俺は対価を払い。お昼ご飯をゲット致しました！　ありがとう下和田くん！」「そんな大袈裟な」

「ん？　どうした。笑顔が微妙だぞ？」

「いや、なんというか・・・なんでパンを

「辛口ギャル」とか

「お嬢様」とか言ってたのかなって・・・」

なんだそんなことか

「こっちの方が面白いからだよ！！」

・・・あれ、沈黙？

「あ、ゴメン。ちょっとだけ呆れてた」

ああ・・・

「ちょっと自重しまゝす」

「うん、あと声のボリュームもうちょっと下げようよ。ちょっと睨まれてるし」

ん、睨む？

(・・・ほら)

下和田の小声とアイコンタクトで睨まれているという所を見ることが、どれどれ、どこの誰かなあ――

「ウオットオツ!？」

そこには鋭い眼光が！ 主に俺に注がれる眼光が！ めっちゃ睨まれてんすけど！

こ、この眼光の主は・・・。

よく知ってる。よく知ってますとも。

あの俺を見るときの鋭い目つきと垂れ下がった犬の耳みたいな髪型(四つに結わえて耳を隠すように降ろしている。変なツインテールてどこか?)とミニマムな外見を忘れる筈が無い。

やつの名は生意気な一年生。

――町田 のどかくまちだ のどか――

――キッ!――

真正面から目が合った。その鋭さ今日も研ぎ澄まされておりまして・  
・結論。

(ちよゝコエエツツ!?)

「なあ、何でこっち睨んでんのかねあのヒットマンは?」

「そりゃあ、騒いでたからじゃ?」

「騒いでたからじゃ?」て首を傾げて言われてもね

「何だよ! 騒いでんの俺だけじゃないだろ? なんで俺ばっか睨まれてるんだよ!?!」

納得できないですねこれは!

「そんなのいつもの事じゃない? 町田が暁を睨むのなんて?」

・・・・ああ、そうなんだよ。何が気に入らないのかやつは俺の事を親の敵みたいに睨んでくる。  
まあ・・・・心辺りが無いわけじゃないけど・・・・それでも毎度毎度これはないよなあ。

「ああ、いつもいつも何なんだよあの

「犬っころへアー」なチビッコは! あの目は何だ! とも○ちか  
シヨ○カーの首領かよ!?!」

「ちよっ! そんなこと言って大丈夫!? なんか町田の顔が険しくなったような・・・・あれ、聞こえてたんじゃ」

と、慌てて俺を肘で小突く下和田。 いやゝ、ここからあそこまで

結構離れてるぜ下和田よ。そうそう聞こえるわけ……。

……

「なあ、下和田くん」

「なに？」

「俺、実は永井の豪ちゃん先生の名作

「デビルマン」が結構好きなわけだが」

「へえ……」

「いま俺の目の前に

「デーモン」がいるのだが……」

「その例え、失礼だと思うけど。暁の言いたいことはわかるよ」

じゃあ、あれはやっぱりアニメの歌詞のとおりに言おうと。

デビルイヤーは地獄耳！？

なにもんだよ！マジ怖いんですけど！

よし、ちょっとあちらには落ち着いて貰いましょうか。とりあえず手でも振ってみるか？　こう、ヒラヒラ〜っと。

「あ、町田こっち来た。凄い早歩きだ」

て、おいおい！　来なくていいよ来なくて！？　てか、何気に俺の傍から離れてね親友！

「ん？　ああ、怒らせたのは多分俺じゃないと思うから。ゴメン」



素敵な答えありがとう。ハハハ・・・て来た来たキタ!?

ツカツカツカー――と俺の前にピタッと止まった!?

「な、何!? 一一」

何だよ! と、言おうと思いましたが、

「・・・チツ!!」

舌打ちされました。ギロツと睨んで俺の横を通り過ぎて行きました。

今日、何度言ったかわかりませぬが

超怖かったです。

ちょっと悔しいのでその後ろ姿に向かって

「くそ、覚えてやがれ・・・」

と、小声で言ってやったぜ。イエイ。

――ギロツ!!

ヒイツ!? ゴメンナサイ!!?

「暁、格好悪いぞ」

・・・うう、もうほつといってくださいよ親友。

「言っとくがなあっ！ 言っておくがなあっ！！ 俺、あんな犬っ子デーモンの事なんか好きじゃないからなあっ！！」

「誰に言ってるの？ 明らかに俺に向かって言ってるやないよね？」

「知らね。多分神様！！」

「・・・神様って」

親友の苦笑いが見えるが気にしないぞ。

俺は麗しき白き肌のお嬢様（特選！ 白クリームパン）に嚙り付く。

モグモグモグ。よし、いいか！ 俺が好きなのはな！！

「菊池でしょ？」

「親友が読心術を！？」

まさかそんな特殊能力が！？

「うん、そうそう菊池なら――」

クラスメートと話してただけでした。俺ちよつと恥ずかしい。

まあいい、菊池の話が出たんだ。言ってる！

（あの娘の名前は菊池 琴くきくち こと＞ ショートヘアの似合ういい女。といっても美人てほどじゃない。いや、可愛くないわけじゃない。そうだ、素朴な可愛さってやつだ。誰とで気さくに話掛けてて超明るい！ まあ、胸がちよいあれば――）

「褒めたいのか乏しいのか解んないな。たまに本当に好きなのか

疑いたくなるな」

「今度こそ読心術!？」

「や、声出てたから」

え、マジ? やべ、気をつけよう。と、心に決めたところで一言よろしいか?

「下和田。人の恋を疑うとはどういうことだ!」

「所々にトゲがある気がする」

え? そんなトゲのあること言ったかしら?

「いや、でも俺の気持ちに嘘は無いぞ! 胸もデーモン町田に比べれば……あるよな? まあ、理想は豪ちゃん先生のキャラくらいだが……」

「話、微妙にずれたね。てか、いつまでデーモン引っ張るの? 町田も結構可愛いじゃない」

正気か? 俺はあの形相はデーモンにピッタリだと思うが――  
「下和田。お前はあれが好みか? そんないいもんでもないだろ? ほっそりとしたミニマム系でそのくせホッペはプクツと健康的で眼光鋭いツンとした吊り目がいいのか?」

「……結構よくみてんだね。そんなツラツラと特長が言えるなんて……本当は町田に睨まれるの結構好きなんじゃ」

冗談は止めてくれ!?

「睨まれるの好きってどこのエムよ俺!? やつはデーモンだよ! 妖獣 イヌツリメだよ! 親の仇みたいに睨んでくるやつだよ!

くそ、俺のなになが入らない!!」

「全部。かもよ?」

・・・なんか酷いこと言われた気がする――で、このソプラノボイスは下和田じゃない!?

「あれ? 菊池、何か用?」

眩しい笑顔のショートヘア 菊池 琴!?

「ああ、うんうん。あっちで下和田が知らせてくれたって聞いたからさ。軽くお礼をと」

そう言って下和田に素敵な笑顔で

「ありがとね」という。俺の憧れ。ちくしょ、俺も言われてええつ!!

「別にたいしたことはしてないよ」

ニッコリと女受けしそうな笑顔と温和な口調が今はムカつきます。

「そう言うわけにはいかないの」

と、再び笑顔の菊池。ああ、また笑顔向けられてうらやましいなチクショウ!?

「あ、そうだ。佐東」

と、突然俺の方に顔を向ける菊池。

なに! 俺にも用が!! ちょ、ちょい待て。よし、落ち着いた口調で。

「……にゃんだよ？」

その間が何だ！ 噛んでんじゃないよ俺！？

「うん、あのさ」

あ、噛んだのスルーしてくれる。さすが俺の憧れ。細かい事は気にしない。さ、用件聞こうかな？

「あんまりくのどちゃん>いじめないでよ？ あの娘ちよつとシ

ヤイなだけだから」

「え？」

「じゃあね」

本当にそれだけを言って去っていく俺の憧れ。

……ていうか

「なあ、下和田」

「ん？」

「<のどちゃん>て、誰？」

「町田の事でしょ？ ほら、町田 のどかでのどちゃんだ」

ああ、なるほど。でもな疑問がもうひとつあるんだ。

「……俺ってそののどちゃんをいじめているように見えるのか？」

「菊池にはそう見えただじゃない？」

「……むしろ、視線の暴力で虐められてるのは俺だと思うんだが？」

「菊池にはそう見えないんでない？」

・・・なんか、色々とショック。

二.これは・・・(夢?)

よし、風呂入った。歯も磨いた。テレビも今日はもうないと、いうわけで

「寝るか」

今日は色々と疲れたからねえ。早く寝て忘れられますか。

とと、その前に

俺は寝る前の軽い儀式をば。

俺の部屋に貼りつけてあるグラビアアイドル小田切　メイ<おだぎり　めい>のポスターを眺めながら俺は拳を突き上げ

「明日もがんばりましょい!!」

と気合いを入れて叫んだ。一階から両親の苦情が聞こえるが気にしない。

だって俺もう寝るし。

良い夢見れるかなあ。おやすみ。

疲れていたのか俺の意識は速効で落ちていった。

――――

——チチチ

遠くで雀の鳴き声が……てことは朝かぁ。我ながらグッスリだったようだな。

うし、起きるか。

……なんか体が重いような気がする。なんだろう、軽く押し潰されるような感覚が……。

ええい起きなきゃ遅刻。起きなきゃならんだ俺！だらけるな立ち上がれ！！

『オイシヨツ！』

俺は振り子のように体に反動を付け起き上がった……の、だが。

（今の……誰だ？）

俺の耳にこの部屋に響く事の無い。何と言うか……可愛らしい声だ。

『なんだいまの』

……



『ん？』

んん！

『ちょっ！　これ』

俺の声か！？

何だなにが起こった。何で俺、こんなに声高くなってるの！！

『ん、んん！？』

何か胸の辺りに違和感が・・・何か重い。ふと下を見えます。

・・・

何かが邪魔をして見えません。

何だろうかこのサッカーボールみたいな物体は。重さの原因はこれか？

パジャマのボタンを胸元まで外してみた。

・・・

付いてるね体に。継ぎ目無く、自然に。

コレを突いてみた。

柔らかい。なんというか、感覚がある。

・・・えと、これは。

『胸の谷間……タニマ!?!』

え、え、なにこれ!?! なにこの声!?!

てか、俺なんで女物のパジャマ!?! 心なしか目線がいつもより低いような……て、部屋もなんか違う!?!?

『ぼ、ポスターがメイちゃんじゃない』

見たことも無いイケメンのポスターにチェンジしてる。

ポスターの横にこんな洒落た鏡なんて無かったし……ん、鏡?

俺は微かに映ったものに驚いて振り返った。その際、俺の顔に髪が当たる。

俺の髪が伸びてる。

そして、啞然とする俺と同じように鏡の中の人物も啞然としていた。

そこにいるのは目をパツチリと見開いて驚く、ロングヘアの巨乳ちゃんの姿があった。

てか……え……コレ……オレ?

『ナンダコリャアアアアッツ!!?!』

俺は思わず絶叫した。

俺の絶叫に朝から何事かと部屋の前まで来たが俺はがっちりどアノブを掴んで

「な、なんでもない！」

と無理矢理乗り切った。

「ふう、母ちゃんに息子のこんな姿見せられないも、ん？ な？」

と、汗を拭った所で俺はふと気付いた。

声が違うのに母ちゃんは気付かなかったな？ それにやけにあつさと戻って行ったのもなんだか都合が良すぎる。

「ん？ ああ、そうか。なるほどな」

俺は一つの結論にたどり着いた。これならなにもかもが納得がいく。

「これは・・・夢だ！！」

そうだ夢だよ。なんかおかしいと思ったんだ。ハ、ハ、ハ。

そう思うと気分が楽になって来た。なんだか視野も広くなってここが俺の部屋と同じ間取りだと気付く。ひとつひとつの小物が違うだけなんだな。

ほら、白いカーテンになってるし勉強机の上には乱雑に置かれたマンガの山では無く。俺には全く縁の無い化粧品が少し雑に置かれていて、中古テレビの下のラックには

「アメ○ークコレクションDVD」ではなく。なんやらようわからん恋愛物の洋画とか邦画のDVDに変わっている。

ハハハ、夢だ夢だ。ちょっとリアルで驚いたけど完全に夢だ。ん、夢なら覚めるんだよな。

そう考えると何か勿体ないぞ。

「よし、目が覚めるまでこの夢を楽しもうではないか！」

とりあえずは下に降りてみるか。

「お、おはよ」

下に降りて恐る恐る母ちゃんに挨拶。

いや、夢だとわかっていてもこの姿で会うのは少し緊張ですわ。

「ん？ ああ、おはよう」

だが、母ちゃんはいつもとどおりの素っ気ない挨拶だ。ま、当たり前か、この夢じゃこの姿が本当の俺だもんな。

「ああ、そういえばさっきのあれは何事？ お父さんもびっくりしてたわよ」

「あ、うん。ちょっと怖い夢みて寝ぼけてた」

思い出したように先ほどの絶叫について聞いてくる母ちゃん。それに対して苦しい言い訳をする俺。

「ふーん、ま、いいわ。ご飯すぐに用意するからその間に着替えな。きびきび動かないと友達待たしちゃうわよ」

母ちゃんはさして興味もなかったようで、顎でハンガーに掛かった制服を指すと台所作業に戻っていった。

うーん、さすがは夢。適度に都合がよろしい。

「どうしたのよ？ 納得したような顔をして？」

「や、なんでも。さ、着替えましよう」

「まったく、今日は変な子だね」

「・・・・・・・・うむ」

予想通りだったが、やはり制服は女子の物か・・・・・・・・そりゃそうだ、いま俺は女だし。

コレに袖を通すのは結構な勇気が必要だが・・・・・・・・ええい！ これは夢だ！ 別に女装をするわけではない！ 問題無い！

俺は意を決してパジャマを脱いで下着姿になった。

「・・・・・・・・やっぱ、下着も女物だな・・・・・・・・」

やっぱりちよつとショッキングだなこれは・・・・・・・・。

えーと、ブラウス装着、ネクタイ装着。うん、ここまでは男子の制服とさほど変わりはないな。

さて、問題は・・・・・・・・。

「・・・母ちゃん」

「ん？ なに？ なにか用意して無かった？」

「や・・・そうじゃなくて」

「???」

「・・・スカートって、どう履くの？」

そう、問題はこのスカートだ。履き方なんて履いたこと無いからわからないんだなこれが。

だが、そんな俺の深刻な質問に母ちゃんは溜め息ひとつでこう返した。

「あんた、なに馬鹿な事言ってるの？」

バツサリすか！ けど、この反応が普通だよな・・・。

ええい、ままよ！

このまま履けばいいんだろう！

俺はやけくそ気味にスカートに片足を突っ込んだ。

そして――

「よし、これでどうだい母ちゃん」

ふう、我ながらよく履けたもんだ。テレビとかで見たのを見よう見真似でやったただけだが、ま、問題は

「あんた、痴女にでもなるき？」

あ、アレ？

「ファスナー全開、パツクリ開いてパンツ丸見え。 ついでに後ろ前」

「へ？ ほ？ ワツツ！？」

次々と挙がる母ちゃんのご指摘に俺は慌てて反応。

確かに横のファスナー（てか、こんなの付いてんのか！？）全開。横パン大開放。ポケットに手をつ突っ込むと後ろへと手が差し込まれます。

「あ、ハハハ。速攻！？」

俺は慌ててスカートを脱いで瞬間シャツとソックスになり、スカートを片足で回転させて一気に引き上げる。

ホック止めた！

はい、ファスナーをグイッと上げて——！？

「イタイイタイイタイ！？ パンツ、パンツと肉挟んだ！？」

勢い余ってパンツと太股がファスナーに巻き込まれてしまった。

「朝っぱらからなにやってんのあんたは……………」

ひとりコント状態の俺に母ちゃんは呆れながら

「キャベツの味噌汁」をそっとテーブルの上に置いた。

で、ひとりコントな着替えと母ちゃんの朝ご飯を平らげてようやく登校するため外に出たのだが。

・・・あー、なんだな。今まで端から見てた時はなんにも感じなかったのだが・・・んー、個人的な事だが

「落ち着かない・・・スースーしてすぐオチツカナイ！」

そう、この短いスカートというものが落ち着かないのだ。下から風が突き抜ける感じが・・・もう、ね。

「なんだよこれも、よくこんなので外に出れるよなあ。女の方は凄いのよ。俺はもういまの時点で恥ずかしくて死ねる！」

なるべく風が通らないようにスカートを引っ張ったりしてみろけど・・・やっぱりスカートが短い。とても全体をカバー出来るとは思えない。

くそ、男の時は短いの大歓迎だったのに、いまはとてもとても今まで不可抗力ながら見えてしまっていた数人の方々に本気で謝りたい気分だ。

とりあえず、学校に着いたらササッとジャージを履いてしまおう。正直、見ていてあまり好きではない恰好だったが、今は早くあのフルチューン装備になりたいぜ。

「――い。あれ？通り過ぎ――」



ともかく人目の余り付かないうちに学校へ――

「おい、聞こえて――」

ん？ 待てよ？ ジャージあったか？ いや、これは夢なんだから都合よく――

「おい、て、ば！ ちゃん聞こえてますかあ！」

……んん？ なんかさっきから声がするような？ 誰かいる？

ふと、声のするほうを見ると

「お、よしよし、やっとこっちに気付いたな」

「え！？」

そこにはニツと笑顔なショートカットの少女がひとり。

その少女とは

「き、菊池。 菊池 事うっ！？」

紛れも無い。夢の中でも変わらない。小顔のショートカット菊池琴。俺の惚れた菊池 琴だ。

「何よ？ いきなりフルネームで」

いきなりの俺の裏返った声で菊池は目をパチクリとさせている。

う、いかん。何か言わなければ

「ああ、ゴメン菊池さん」

「こちら」

「フギュッ!？」

いきなり鼻を摘まれてグリグリされてしまった。

なんだ、何か間違ったか!？

「いつからそんな他人行儀だ」

顔を近づけて目を見てくる菊池。か、顔がチカ!？ 息が、掛かる!？

俺の心臓はバクバクだ。だが、菊池を知ってか知らずか。さらに顔を近付け

「あたしの名前を言ってみ？」

と、聞いてくる。

「え、菊池・・・琴でしょ？」

「はい、リピートはしたただけで名前を言ってください佐東 朱音くさとう あかね>さん」

え、えっと、それってつまり・・・は。

「っ、こと?」

俺がそういった瞬間、至近距離で満面の笑みを浮かべて

「やっと言った。まったく、大親友を他人行儀な呼び方す・る・な  
!」

額と額をゴチンとぶつけて来た!

「う、チイツ・・・!」

じ、地味に痛い。けど、それよりも今の言葉は!?

「だ、大親友?」

「ん? 呼んだかい大親友」

「き、琴と、お、あたしは大親友?」

「何を当たり前の事を言っているの。朱音?」

「・・・あっ」

こ、言葉が出なかった。

「なに、ちょっと、どうしたの朱音？ 調子でも悪いの？」

放心状態の俺に菊池が不思議そうな顔で再び俺の顔に急接近してきた。

「な、何でもない！」

待たして顔が近い！？ 俺はググっと上半身を後ろに反らした。

「ん？」

やば、なんか不自然だ。

「ほ、ほら！ 元氣げんき〜っと！」

俺は苦し紛れに思い切り上体をエビ反りよろしくで反らした。

「・・・・・・」

やっぱ、いきなり上体反らしは怪しかったか・・・・？

「・・・・パンツ見えてる」

「ディエツ！？」

速攻スカート押さえ！！

「ふふ、冗談ですよ」

「へ？」

慌てた俺に、菊池はムフフと人差し指を唇に当てて不適に笑っていた。

「よし、いじり終了」

「は、はい？」

菊池はニンマリと唇から指を離して両手をパンパンと叩いて言葉を続けた。

「そ、わたしを置いていこうとした朱音に軽いお仕置きだよ」

「え？ 置いて？ お仕置き？」

な、何を言ってる？

混乱する俺に菊池は鼻柱に指を付けて言う。

「だって酷いでしょ朱音。一緒に学校行く約束してたのに無視して勝手に行こうとするし、なんか変な態度とるし、こっちが合わせたらまた変な態度取るし」

・・・ああ、そうか、菊池は俺の言動をそうみていたのか？ 母ちゃんが言ってた友達って、きっと菊池だ

「ご、ゴメン！ ちょっと考え事してて、それで、本当にゴメン！」

俺は深々と菊池に謝った。夢の中での約束だけど、これは俺が悪いから。

「フフ、冗談だよ。怒ってないから顔を上げて」

「え？」

「なんだかんだでわたしもいじり楽しませて貰ったしね」

菊池がニンマリ笑って

「おあいこ」と自分の両手を真っ直ぐにして、お互いの頭をチョップした。

「うし、オールオツケー。学校行こうか」

「え、お、おお！」

菊池が俺の手を取っていきなりダッシュした。

「ちょっと急がないと遅れちゃう！」

「お、あのさ！」

「んん！」

「もうちょっとスピード落として話せない！」 「んん、十分に走ったからもう余裕か、なっ！ とう！」

——ズザザッ！

と、菊池はスライディングタックルでもしそうな勢いで急ブレーキ！  
俺の体は一瞬だけ菊池の頭の上まで浮いた気がした。

「と、止まるなら、一言いつてから止まってくれ・・・ないかな」

俺は肩で息をしながら、菊池に言った。

「アハハ、ごめんごめん。今度は気をつけよう」

等の菊池は俺に軽く謝りながら砂埃を叩いていた。

菊池ってこんなに豪快だったかしら。俺の夢だからちよつと違うのか？

・・・しかし、夢の中でも体って疲れるもんなんだなあ。精神的ななんとかってやつか？

「んん、どうしたあゝ、あかねゝ。さすがに疲れたかゝ」

菊池が俺の夢の中での名を言う。

・・・朱音、か。

朝方に母ちゃんに呼ばれたのと生徒手帳の確認で名前は把握できたけど・・・。

なゝんか、まだ違和感バリバリだよなあ・・・。いや、悪い名前じゃないんだけど・・・。

と、俺がブツブツと言っていると

「お、あそこを歩くは我らが可愛い後輩じゃありませんか」

菊池は知り合いの後ろ姿を見つけたようだ。そちらにダッシュで近付いていく。

俺もその後ろ姿を目で追っていく。

「ん・・・ありやもしかして」

何となく見覚えのある少し遠くからでもわかるミニマムな身長と髪を四つに結わえて肩から下に降ろしているあのイヌミミヘアーは

「のゝどちゃん！ おっはよう！！」

その後ろ姿に追いついた菊池がその背中にパチンッ！ と軽くもみじを作ると

「・・・??」

あの大きなツンとした瞳が現れた。

（ゲゲッ！ やっぱりお前か・・・）

俺はそっと指で顔を隠しながらその隙間からヤツを見る。

そこには鞆を両手で持ったデーモン・町田 のどかが菊池と向き合っていた。



三．夢の中？　これは！？

間違いなく

町田　のどかだ。

俺の天敵・・・デーモンだ。

おそらく、町田はあの恐ろしい瞳を自身の背中にもみじを付けた菊池へと向けるだろう。

やばいやばい、あんなもん普通のやつが耐えられるはずが！！

「無いだろ！！」

俺は町田の眼光から菊池をガードするために二人の間にダッシュを  
――

「あ、おはようございます琴さん」

ズザザアアツツ！！！！

う、薄いながらも笑顔を向けているだと！

あ、あのデーモンが、嘘だろ！？

「・・・？？　あの、いま朱音さんらしき人が走りすぎて行った  
気が」

「んん、今日の朱音はなんかおかしいというか・・・何をやってん

のよあの子は」

ああ、遠くて近いところで二人の声が聞こえるような……。

「おうい、あかね、大丈夫か。傷は浅いというか、全くないぞ」

「でも朝からボロボロですね朱音さん。大丈夫ですか」

「んんゝむ……」

「お、気付いた」

「朱音さん」

目を開けるとそこには心配そうな表情の菊池と……町田。

「……」

「起きれますか？」

ああ、イヌミミデーモンが俺を心配そうな顔で……。

夢って、こんなのも見せるんだ。信じられん。

「う、うん、大丈夫」

俺はゆっくりと立ち上がった。「なんともなくて良かったです」

町田は控えめに鈴を鳴らすような優しい笑顔を俺に向けた。そこに

はいつも俺を睨むようなデーモンの眼光は微塵も無い。いや、これは素直に

「・・・か、可愛い」

と、言葉が漏れてしまう。

「え？」

つい漏れてしまった言葉に町田は少し驚き、頬を少しだけ朱色に染めた。

う・・・なんぞ、これ？

「あゝかねくゝん。きゝみは何を言うちよるのかね？」

俺が釣られて赤面をしていると突如菊池が全校朝礼時のうちの校長の喋り方を真似ながら、俺の発言に物言いを付けた。鞆を頭に乗つけて口笛をヒューと鳴らし人差し指をチ、チ、チと揺らしているのはよくわからんが・・・。

「のどちゃんを可愛いと言うなんて今更過ぎるのよ！ のどちゃんは前からシャイでちっちゃな可愛い子犬ちゃん。まさにうちのマスコットでしょうが！」と、なぜか親指を前に突き出しゲームっぽいポーズを決める菊池。

「・・・・・・・・」

んゝ、何と言いますか・・・。

「ん？ どうした二人共」

「あ、うん。ゴメン」

「ちょっと恥ずかしかったです」

俺達は正直に言った。

「恥ずかしいって……ああ、やっぱり恥ずかしいかな？」

コクリ。

「……あーっとう、せっかく稼いだ時間が無くなっちゃう！ 二人とも、はい、ダッシュ！！」

「え、おおっ！ また！！」

「ちよっ、琴さんお手柔らかに」

今更ながら周りの目が気になったのか、菊池は再び俺達を引っ張ってダッシュした。

「……なあ」

「はい？」

俺達を引っ張る菊池の走りに必死に合わせながら走る町田のピョコピョコと四つに跳ねるイヌミミヘアーを眺めながら話し掛ける。

「き、琴っていつもこんな感じなの？」

「……」

町田は俺の目の奥を見るように少しだけ見つめ、やがて目元に少しだけ笑いを作り

「はい、いつも通りの琴さんです」

と、言った。

「そっか」

俺の夢の中の菊池は俺の知っている菊池じゃないけど、こんなふうに弾むように俺達の手をグイグイと引っ張って走る菊池も結構良いなど俺は俺は思い始めていた。

「おっし、着いたあっ！」

俺と町田は菊池に引っ張られる形で五分もしないうちに校門の前まで着いてしまった。

し、正直、途中からの自分の限界を超えた全力疾走はき、キツイ……さ、最初に少しだけ町田と会話できたのが信じられない。

隣の町田も表情こそはあまり変えていないが肩を上下させて息を整えていた。

町田の髪はかなり乱れている。多分、俺も酷いことになっているんだろうな……。

「ん〜、二人してどったの。ばてちゃったか？」

……同じ距離を二人も引っ張ってきた菊池のほうがピンピンしてい

るのはどういことだろうか？

菊池って、意外と化け物的な体力スペックを誇っているんじゃないかしら？……。　「んゝ、ちょっと調子に乗りすぎたかな？　今度からはもちよつとゆっくり走ろうかな」

「そうですね。そうして頂けると非常に助かります」

んゝつと伸びをして菊池は

「タハハ、面目ない」と、舌をチロツと出した。

「でも、遅刻はしませんね」

「いや、普通に間に合う時間に来てんだから立ち話をほどほどにしたら間に合うだろう？」

「それ、できるんでしょうか？」

……。ああ、今日の様子を見ると無理っぽいような。

「まあ、なるべく頑張ろうか。な、琴」

「うむ、とりあえず頑張ってみようか。お互いにね」

「ふふ」

俺達は何だかわからんがおかしくなってその場で大笑いした。

と、ひとしきり笑ったところで見知った顔が自転車に乗ってやって来た。

俺はいつものように軽く声を掛けた。

「お、下和田、おはよう！」

俺はご機嫌なおはようピースで挨拶をした。

下和田も

「あ、おはよう」

と、軽く手を上げて自転車から降りる。

そう、思っていたのだが

「え？」

と、一瞬戸惑ったふうな表情を浮かべて、少しだけ宙を見上げると少し控えめな爽やかな笑顔で

「おはよう」

というそのまま自転車に乗って先に行ってしまった。

「あ、お、おい！」

な、なんだあいつ？

どうしちゃったんだ？

遠ざかる下和田の背中を不思議な思いで見つめながらなんだか空しくなったおはようピースをニギニギさせた。

俺……あいつになんかしたかな？

「はい、朱音。ちょっとこっち来よう、かつ！」

「お、おおー！」

いきなり後ろから菊池に羽交い締めになると俺はズルズルと校舎の隅へと引きずられていった。

な、なんだ、いったい

「……な、なに」

俺は羽交い締めから開放されるも菊池のジツと見つめる菊池になんとも不安になり、壁にペタツと張り付いて、カニ歩きで横にスライド――

「朱音！」

――する前にガツと肩を掴まれ引き寄せられた。

「な、なになな？」

内心冷や汗タラタラで返事をした。

い、いったい、なんなんだ？ わけが解らんぞ？

菊池が口を開く。

「どうしたの今日は！ 凄い頑張ったじゃない！！」

………はい？

「あ、あの、話が見えないんだけど……」

「なにいつてるの！ 下和田に話し掛けれたじゃない。挨拶までして！」

………????



「そ、それが、どうしたの？」よく、意味がわからないのだけど……。

「とぼけなくてもヨイヨイ！ 心の中は心臓バクバクなのはよく、わかってるて。ね、のどちゃん！」

「はい、ちょっと感動的でした。朱音さん本当に頑張りましたね」

ああ、町田もこっちいたのね……て、本当に何なんだ？ なんで褒められる？

「や、マジでどういうこと？」

「もー、だからー」

まだ俺が惚けてると思うんだろう。菊池はニヤリッと笑って俺の胸元をプニユッ人差し指を押し付けて一言。

「キミの憧れ下和田に声を掛けれたではないかね？」

…………へ？

「今まで結構やきもきしてたんだよ。いつ話し掛けるかいつ話し掛けるかってさ」

……………ちょ、待って、憧れ？ 誰が？ 下和田？ 俺の？

「でも、この調子だと心配ないね。もしかしたら友達へのステップも」

あ、ああ！？

「まだ気がはやいような。まだもつとじつくりと朱音さんの気持ちを下和田さんに」

「いやいや、のどちゃん。ここは急がば回れと」

ああああ!!

「ありえねえええくくくつつつ!!!!?」

しもしもしもしもーーー

「しもわだっ!!!」

動揺しまくった勢いだろうか。気がつくと俺は下和田の前にいた。突如現れた俺に下和田は目をパチクリとさせて

「え、あ、はい？」

と固まっていた。

「お、お、お!!」

「お？」

俺は何を、何をしたいんだ？ お、落ち着け俺！ これ、夢だよ夢。冷静になれ……そうだ、一回目を覚まそう。

「ちよっ！ どうした朱音!!」

後ろから誰かの声が聞こえる。けど、今は目を覚ますことに！

「おおおっっ!!」

ごちいいんっ!!!!?」

俺は下和田の机に何故か思いきり頭突きをしていた。

どこからか誰かの悲鳴に近い声が聞こえるが、俺はチカチカと目の前に星をちらつかせながら意識の奥に飛んでいった。

――――

ん、んん……。

どれくらい意識を失っていたのだろう。なんだか体がゴツゴツして痛い。

俺はゆっくりと目を開けた。

……あれ、さっきまで教室にいたはずじゃ

俺はなぜか芝生の上に倒れ込んでいた。

あ、夢から覚めたのか？ いや、だったら家のベッドの上のはず……。

「どうなって……て、お、おお！！！！？」

思わず喉を押さえた。

声が、声が、

「戻ってる！」

よくよく見るとサッカーボールみたいなお胸がまな板に。

制服も男物。

これはやっぱり。

「夢から覚めた？」

と、して

「なんで芝生の上なんだ？」

俺の隣には健康補助食品が置かれていた。これから察するに今は昼休みなのだろうと思われる。

「ん〜」

健康補助食品のパッケージに書かれたチョコレート味の文字を見ながら少し考えて

「ちょっと動いてみるか」

ジッとしててもしょうがないしな。

俺はチョコレート味をモソモソと食べながら移動を開始した。……  
ちと、飲み物が欲しいな。

食堂方面の自販機を目指していると、特徴的な頭が目に入った。

あれは、町田？

町田はちょうど前屈みになってジュースを取るところのようだ。

「よっす」

俺は自然に声を掛けていた。さっきまで夢を見ていたせいだろう。  
いや、もしかしたらこれもまだ夢の続きなのかも知れないが、俺は  
なんとなく夢の中の町田 のどかのイメージで声を掛けたのだ。

「?……!?!」

町田は不意に声を掛けられて深川だといった表情で俺のほうに顔を  
向け、凄い早さで後退った。

そして、ファンタグレイプを握りしめたまま、あのデーモンの眼光  
を俺に向けた。

……………。

本当に恐ろしい眼光を向けてくるもんだ。

だけど

「なあ」

「!!?」

俺は昨日までの恐怖を感じなくなっていた。

あの、夢のせいだろうか？ 俺は町田を悪い目で見れなくなってる。むしろ、好意的ななにかが芽生えているのかもしれない。

うん、全然怖くない。大丈夫だ。

「ちょっと聞きたいことがー」

ザザッ!?

.....あれ?

「.....」

「.....おい」

「!!!」

ザザザザザッ!!

「ちょっと」

「!!!!!?」

俺が好意的に近づこうとすると、町田は俺の近づいた分だけ後ろに下がる。

なんだこの異様な鬼ごっこは……………。

「いや、だから落ち着いて俺の話を！」  
切りがない。俺は思い切って斜めに跳んでみた。

「は!!!?!」

予想外の動きに驚いたのか町田は動きが取れずに固まった。  
「おいしょっ!」

逃げられないように町田の肩を掴んで拘束することに成功。  
「ひっ!!!?!」

ビクッとイヌミミヘアーが揺れた。

「ふう、さて人の話を――」

「ツツツ!!!?!」

ゴチンッ!!

「オゴッ!?!」

なにか固いものが至近距離から俺の顔にぶん投げられた。

この、重たくて冷たい感触は……………ああ、さっきのファンタグレイプか。

などと考えながら俺は後ろにぶっ倒れた。

「ゴメッ!!? なっ……………」

なにか聞き取りにくい町田の声が聞こえる。ああ、また意識がぶっ飛ぶかと思っただぜ。

「いつ痛う……………」

顔を押さえながら起き上がると、町田の姿は既に無く。代わりに少しへこんだファンタグレイプが俺の隣に転がっていた。

「なんだったんだ? あの町田の動揺っぷりは」

そんなに俺に近づかれるのがいやだったのか? それとも……………さっきの夢と俺がいつの間にか芝生にいたのとの関係が……………ま、なんにせよ周りに人がいなくてよかった。缶ジュースぶつけられてぶっ倒れるとはなかなかカッコ悪い。

俺は町田の置いていったファンタグレイプを手にとると

「ま、もったいねえし」

プルトップを思いきり引っ張った。

ドバアアアツツツ!!



と、勢いよくファンタグレイプが逆噴射した。

「ほんと……誰もいなくてよかったよ……」

うあゝ、体操服あったか？

グシヨグシヨになった服が気持ち悪いのでとりあえず教室へー

「ちよっ！ どうしたのさそれ！」

入った瞬間に下和田と鉢合わせ。

「し、下和田！」

さっきの事を思い出して俺は一瞬、たじろいだ。

「? ? なに？」

下和田が不思議そうな顔をする。

「い、いや、何でもない」

おいおい、あれは夢だろう？

俺は気を取り直して濡れた頭をガシガシと掻きながら笑ってごまかした。

「いや、ちょっとジュースが思いきり逆噴射しちゃってなあ」

「え、大丈夫？」

「ああ、今日はジャージでも着てすごすわ」

言いながら俺はジャージの入ったボストンバックを手に取りろうとする。

「あ、なんか調子戻ったみたいだね」

ん……？

下和田の言葉に俺は動きを止めた。

調子が戻った？ なんのことだ？      もしかして、俺が芝生に寝転がっていたことと関係があるのか？

「なあ、今日の俺はなにかおかしかったのか？」

「え、なにいつてんの？      おかしかったじゃない。俺が話し掛けたら赤くなったり、オロオロしたり、泣き出しそうになったり」

なんだ……その、恋する乙女みたいな反応は！！？      俺が下和田にそんな気持ち悪い反応を！？

「そしたら、調子が悪いからって外に出たんじゃない」

なにやら俺がショックを受けている間に話は少し進んでいたようだ。

なにがそしたらなんだ？ 俺はもう一度聞こうとする。

「それと、あれはちよつとまずかったんじゃない？」

が、それよりも何か気になる事を言い始めた下和田。

「ま、まずいとは？」

「とは？ て、暁。覚えてないの？ 菊池を凄い勢いで押し倒した事」

は！！？

「な、なんだそれ？」

とても現実的ではないことを言われた気が……。

「なんだそれ、て言われても。暁泣きながら菊池に抱きついてたじゃない？ 菊池、凄い困惑してたけど……あれ、怒ってたんじゃない」

もう、なにがなんだか……。てか、マジでヤバそうだな！  
あ、謝らないと！

「そ、それで菊池は………」

「今日は早退しただろ？ お母さんが倒れたってことで」

な、なんてこった…………。

帰宅後、俺はベッドの上で考えた。

なんだ？ 何が起こった？ あれは夢じゃなかったと？  
俺があ  
っちに行ってる間にあっちの俺がこっちに来てたってか？

「てか、それってなんだよ！！？」

駄目だ。考えれば考えるほどわけが解らん。

「もう、答えが出ない。だったらもう、寝てしまおう！！」  
俺は小田切 メイちゃんのポスター（謎のイケメンから元に戻って  
いた）を一瞬眺めてから布団の中に潜った。

—————

（ちよつと起きて）

声？ どっかで聞いたことがある気がする。

（ねえ、ねえってば）

…………グウZZZZ

「お、きろっ!!!!」

ガッチインッッ!!!!

「いがっ!!!?!」

俺の額に衝撃が走った! な、なにが……め、目覚まし時計!!  
こんなもんが俺の額に! て、これ、誰が投げた!!!

「だ、誰かいる……のか!?!」

「やっと、やっと起きた」

目の前に確かに人がいた。なんか少し疲れた表情で俺を見下ろすピ  
ンクのパジャマの女がひとり。

「あ………」

俺、俺はコイツを、知ってるぞ。

コイツは

……。

#### 四・（俺？）Ⅱ（アイツ？）

コイツは……。

「……俺？　だ」

ああ、見間違えようがねえ。昨日、俺は目の前のコイツだったんだから、夢と思いたいが夢じゃ無いって昨日いたいほど解ったし……。

「んん、そう、アンタはアタシ」

目の前の（俺？）は交互に俺の顔と自分の顔とを交互に指して頷いている。

「意外と物分かりが良くて助かる。流石は腐ってもアタシっわけね」

満足気に両手を前に組んでうんうん頷いている目の前の俺？

てか、腐ってもってあんまい言葉じゃ無いな。女の子にはあんまり言っちゃ欲しくないかも知れんぜ。いくらコイツが俺でも……。

「んん？」

「????　どったのよ？　いきなり真面目の腐ったみたいな顔して」

「いや、あのな」

目の前の俺？をまじまじと見てみる。

「なんで、俺が俺の目の前にいるんだ？」

そうだよ。俺はここにいるのになんで目の前に俺がいるんだ？  
よく考えたらとんでもない事が起きてんじゃね！？

「え？ 今更そこの？」

なんだかとってもあきれたご様子の俺（♀） 結構長めな黒髪を託し上げてポリポリしてる。

「て、言われてもな・・・お前はなんでこんなことになってんのか解んの？」

「や、解んないけどさ」

なんだいそりゃ！

「お前も人のこと言えないじゃねえか！」

「うるさいなあ。アタシもさつき起きたばかりで実は軽く混乱してたりすんのよ」

ハア、とため息ひとつな俺（♀） うわあ、ひとには軽くあきれた態度とって自分はそれかよ・・・。

ホントにコイツは俺？ 俺ってこんなキャラだっけ？

ま、そこらはとりあえず置いてくとして。

「さっき起きたって、お前どっから起きたのよ？」

俺の部屋にはいま俺が座ってるベッドしか寝るところは……  
・・!!!?

「おい、それはちよつとマズインジャネ!？」

いくら俺自身といつても性別違えしっ!?

「なに考えてるか知らないけどキモい妄想はやめてね」

「え? ああ、ハハ、妄想なんて……しないさ」

「……なにさ、いまの間は、まさかマジで」

「自分にそんな妄想するわけ無いってもんです!？」

「……ま、いいけどさ」

フウ、焦ったぜ。実はちよつとだけ考えてたりして……。

なんか若干胡散臭そうな目を一瞬俺に向けてから、俺（♀）は話を進めた。



「なんかアタシの部屋はあっちになってるみたいなのよ。ほら、隣にあったじゃん。物置部屋が」

「ああ」

そーいやあったな隣にそんなもん。親父と母ちゃんの青春のガラクタ置き場になってから、記憶の底に存在を沈めてたけど。

「そこがアタシの部屋になってるみたい。なんかよくわかんないけど」

「へー、そうなんか。ん？　じゃああのガラクタの山はどこへ？」

「さあ？」

俺と俺（♀）は首を傾げる。

ま、さして重要な事じゃなし。気にしない気にしない。

「ん、ま、他の部屋から起きてきたなら良し。俺はまたひとつのベッドにキュウキュウ詰めになってたのかと一瞬思ったぜ。そのデカパイが背中当たってたのかと、ハハハ！」

ほんとお馬鹿な俺。ま、自分の胸が当たっても嬉しくは……..  
うん、嬉しくは……..無いはず。

「……………」

「ん？　なんだよ急に黙って」

俺の言葉を見殺して俺（♀）は机へと移動し

「うん、これでいいかな」

と言って徐に野球のボール（はて、何故そんな所に？）を手にとると

「ふっしっ！！」

いきなりアンダースローで俺にぶん投げてきやがった！

「ううエエッ！？」

自分の物とは思えない奇声を挙げて頭を抱えてブロック。

バンッ！　とボールは壁に当たって明後日の方向に飛んでいった  
（どうやらゴム製だったようです）

「チッ、コントロールが」

手をプラプラさせて舌打ちする俺（♀）

「あにすっだよオメエよっ！？」

流石にキレた。

「大きい気にしてんのよ！！」

あっちもキレた。

「だ、だいたい女の子に向かってデ、デカ。最低最低、超サイテイ！？」

「だからって人にボール打つけていい理由になるものかよ！良い子が真似したらどうすんだよ！！」

「良い子なんてここにはいないの！」

「はい、挙げ足取りいただきました！ あ、ああ！ そういやテメー！ 目覚まし時計ぶつけたよな！」

「しょうがないっしょ！ アンタ起きないんだもん！！」

「下手したら死んでんよ！？」

「いいじゃん！ ピンピンしてんし！！」

「いいわけあるか！ デカパイ女！！」

「デ、デカパ、言うなああっっ！！？」

ええと、後から考えたらお互いにわけが解らなくなってたんだと思う。

いつの間にか俺達は取っ組み合いになってまして

「うるさい！ 近所迷惑！！」

母ちゃんが止めに入るまでやっていた。

「全く、休みだからって朝っぱらから喧嘩して！」

母ちゃんは朝からとても機嫌が悪かったようで

「外出て二人とも頭冷やしな!!」

俺達は外に放り出されてしまった。

「で？」

「……なに」

「なんで俺ら仲良くドーナツ食ってんだよ」

俺達はいま近所の有名ドーナツチェーン「マスタードーナツ」通称マストドにて向かい合ってコーヒーを啜っていた。

「別に仲良くじゃ無いけどね」

コーヒーを机に置いてため息をひとつな俺（♀）

「ママに追い出されたから朝食の代わりに食べにきたんでしょ。割り引き今日までだったからちようどいいからって」

まあそういう流れで来たんだったなそーいや。

「まあ、頭を冷やすのにはちようど良かったけど」

フレンチクーラーを口にしながら俺（♀）はうんと頷いて

「別にケンカするためにアンタの部屋に行ったわけじゃないし」

「ああ、俺もオマエとケンカしたいわけでもないし」

ということで一時仲直りだ。俺自身に聞きたいことあるし

俺達はとりあえずの握手を交わした。

「提案なんだけど、アタシらそろそろ名前で呼ばない？ お互いに名前は知ってるわけだし。いつまでもオマエとアンタだとなんかね。一応、アタシら兄妹でことになってるみたいだし」

「ん、そだな。ええと、オマエは朱音で」

「アンタは暁だったわよね？」

「おう」

「イエス」

お互いに親指を起ててニツと笑った。  
流石は同一人物。結構ツーカー？

「んじゃ、朱音。早速聞きたいのだが」

「ん？ なによ？」

いやあ、気になって気になって仕方なかったんだよな。

「そのスカート。ちと短くね？」

「・・・・・・・・・・」

あれ？

「ちょっと・・・・・・・・舌の根も渴かぬうちに」

といって窓側にススッと移動する朱音。瞳にはちと警戒の色が・・・  
・て

「いや、見ねえし！ 見えないし！！ 変な目で見たわけじゃねえ  
から！！？」

ヤバヤバ、自分に警戒されるってどうよ俺。てか、指摘してなんか  
まずかったか？ 一応、コイツ俺だから軽くいっただけなのよ。

「むう、一応信じるけど・・・・自分自身に欲情してるとか考え  
たく無いし」

欲情って。ちょいとお前さん？

「でも、今度から変なこと言わないでよ？」

「変なことって。ちよつと気になったただだよ。自分が短いの履いてると思うとあれだなあと考えるとなあ……」

「あれって？」

「あれは……あれっと思ったらあれだよ」

「だから、なんなのよ。はっきり言いなさいよ」

わっかんねえかな？ てか、なんで不機嫌な顔してんだよコイツは。ああ、とりあえず軽く俺の意見を言っとくか。

「できれば、そのミニスカートっちゅうもんを履かないで欲しいんだが。履くんならロングなロング」

「やあよ、アタシ可愛いミニ好きだもん」

俺の意見を却下しやがった。

「それにこれぐらい普通っしょ？」

「や、普通かそれ？ 俺には恐ろしく短く見えるんだが？」

「そんなことないよ。アンタが、暁がおかしいの！」

拳を机の上にトンと作って身を乗り出して言葉じりの力を上げると  
朱音。

近えよ。自分の席に戻れ戻れ………ん？

「なんだお前。化粧なんかしてんの？」

近づかないと気付かなかったが、朱音はどうやら薄く化粧をしているようだ。

「それが何よ？」

「や、なんで化粧してんのかなと。別に誰かに会うわけでもあるまいに」

「?? そりゃ外に出るときはメイクぐらい普通にするわよ」

「や、だからなんで？」

「……なにかあるか解らないじゃない」

「なにかって、なにが？」

言ってる意味がわからんな？

「もう！ メイクぐらい普通にするって言ってるでしょ!!」

何故、キレる!？

「だから、なんで普通にメイクすんだよ？」

「あのねえ!」

「?？」



「アタシ！ 一応、女の子！ 女の子なら普通にメイクぐらいするの！ 暁は男の子だから解らないの！！」

「そ、そんなもんなのか？」

「そんなもんよ！」

うーん、女の子ってのはめんどくさい事を普通にやるんだな。おんなじ人間でも性別が違うと普通にやることも違ってくんのか？

「なんか、女って結構めんどくさいのなあ」

いやほんとに

「アタシには男の子のほうがめんどくさそうだけど。て、そんなことよりも、アタシらもつと話さなきゃいけないことがあるでしょ！」

「話さなきゃいけないこと？」

「そうよ、先ず——」

と、朱音が話そうとしたとき。

——コンコン

と、ガラスを叩く音が横から聞こえる。

「「ん？」」

俺達は同時に横を見た。

ガラス越しの外側に片手を挙げる見知った顔がすぐ近くにいた。

「おろ？」

なんだ、こんなところで会うとは。

#### 四・（俺？）Ⅱ（アイツ？）（後書き）

久しぶりに投稿をしました。

自分なりにこう書きたいというビジョンがあります。

しかし、理想どおりに進めるのって難しいですね。

色々と回り道をしまくってますが、完結できるよう頑張りたいです。

こんな自分の作品の続きを待っていたかたがもしもいたら謝りたいです。

間が空きすぎてごめんなさい。

## 五、俺たちの（感情）は別々

「おう、下和田」

ガラスを叩いたのは我が親友下和田だった。

本でも買ったのか小脇に紙袋を抱えて笑っている。ガラス越しでは声が通らないので口をパクパクと動かし

——（そっち行っている？）

と、言ってるようなので俺は指で輪っかを作って

——（OK、遠慮なくきたまえ）

と、返すと我が親友は親指をグッと起てて

——（了解）

と、返して移動した。

「うむ、こんなところで会うとはな……。て、お前は何をやってんのよ」

前を見ると、なぜか朱音は帽子を目深に被ってテーブルに踞っていた。

「あうあうあうあう」

「いきなりどうしたよ？」

オットセイのモノマネっすか？ いや、アシカか？

「こんな、こんなところで会うなんて……」

顔が全く見えんが、声色は戸惑ったような、高揚したような感じが……。

「あからさまに怪しいから顔をあげなさい」

「あ、あや……う、うん」

なんか、落ち着いたらしく朱音はゆっくりと顔を上げる。

と、ちょうどその時

「や、暁」

軽く片手を挙げて我が親友下和田が爽やかな笑顔でこちらに近付いてきた。

「っ！！？」

途端にガバツと踞る朱音。      ??      何がしたいだよお前は。

「おす、下和田」

とりあえずほっておいて下和田に挨拶を返す俺。ま、直ぐにまた落ち着くだろう。結局なにがしたいかわからんが。

「意外なところで会うもんだね。暁がマスドなんて、休日はず派じゃなかった？」

「まあな、今日はちょっと朝食にドーナツな気分だったのさ」

「うわ、似合わないねえ」

「うるせえ！　そういうお前さんは何をしてたんだい？　見たところ本を買ったようだが？」

「ああ、青山 あおやまじろう 次郎の四姉妹シリーズの新作が出たからさ」

「お前も次郎好きだねえ」

「うん、面白いからね。暁も読んでみるといいよ」

「絵の無い本は好きくない」

「先ずはそこから直さないと布教は難しいかなあ」

「ハハハ、俺は漫画とグラビア雑誌系専門だから諦めなさい」

「・・・・・・・・」

俺と下和田が話をしてる間。朱音は黙って俯き、ドーナツを細かく千切って分解していた。

何をしているんだコイツは……。帽子も被ったまんまで、さっきまでの勢いはどこへ？

仲間はずれになって拗ねてんのかしら？　フ、仕方がない。話題をそちらに飛び火させてやろう。

「布教活動をするのなら、そちらのお嬢さんなどは如何かね親友？」

指を挿してそう言ってやると

「オッ！！？」

前方から声にならない声が挙がり、ガチャンとテーブルが揺れた。

「おっと！」

その拍子にコーヒークップが傾き、少しだけ下和田の服にピチャツといってしまった。

「うああっ！！　ご、ごめんなさい！！？」

慌てて自分のハンカチを取り出し、下和田のズボンを拭こうとする朱音だが……。いかん、場所が場所だけにソコはいかん！？

「うう……。。」

行動を起こしてみたものの朱音もその場所がまずい事に気付いたの

だろう。そのままストップしておる（凝視するわけにもいかず、目がグルグルと回り心なしに顔が真っ赤だ）

「おう！ 下和田！ これを使いたまえ！？」

俺は即座にテーブル上にある紙ナプキンを下和田へと手渡した。

「あ、ありがとう」

いあ、見てられない光景でしたので……。

「……ああアア」

帽子を手でグツと目深に手繰り、朱音は小さくなっていく。

ああ、恥ずかしくてたまらないのでしょうか。なんか解るわ。

その後、直ぐに店員が軽く汚れたテーブルをキレイにしてくれた。ありがとうございました。

「あ、あのさ、気にしないでいいからさ」

「………う、ん」

朱音が俯いたまま首を少しだけ動かす。

うーん、なにもそこまで畏まらなくてもいいと思うんだが……。  
どこことなく下和田も気まずそうだし。



「おお、下和田よ。お前もズボンそんだから帰ったほうがいいんじゃない？」

「ん？ ああ、そう、ね」

下和田が俺達のテーブルを放れようとして、止まる。

まだ、項垂れている朱音をジッと見てから頬を掻いて軽く鼻で息を吐いた。

「ねえ、朱音ちゃん」

「は……！！？」

「ほんと、気にしないで。この前のことも俺、怒って無いから。ね？」

「え、……え……？」

なんだ？ スッゲエ困惑した顔になってんぞコイツ。

（この前って……なに？？ アタシ、何かしたの？）

これは、俺の推測からするに、朱音は下和田が言ってる事が訳が解らないと見た。

「じゃ、暁、朱音ちゃん。また明日」

だが、当の下和田は言って満足したのかそのまま帰ろうとする。

「あ、そうだ下和田!！」

それを俺はわざとらしく呼び止め

「ちょいつとこっちいらっしゃい」

そのまま端に下和田と移動する。

「なに？」

「ああ、ちょっと軽く質問。この前ってなんだい？　なんかあったのか？」

「ん、ああ、そういや、暁はあの時いなかったけな」

そういうと下和田は少し言いくそうに

「うーん……」

と、唸ると、少し小声で俺に耳打ちをした。

「じつは、よくわかんないんだが………頭突き、されたんだよ」

「??　　ず、頭突き!？」

頭突きとはあの、ヘッドバット？

「うん、なんかよくわかんないけどあの時もなんか少し、おかしかったような……いきなり朝、暁みたいな挨拶返してきたり」

ん？ ちょっと待て、俺みたいな挨拶って………それってまさか。

「あ、朱音ちゃんには言うなよ。まだ、気にしてるだろうし」

「あ、おお」

「じゃ、今度こそ帰るわ」

帰っていく下和田の背を見送りながら、俺はひとつの事を思った。

これって周りのやつらのアイツと俺の記憶………混ざってんじゃない？

「なんだろう？ なんのこと？」

まだひとり困惑している朱音の元に戻る。

「おい、ちょっといいか？」

「ああ、それより、朱音ちゃんて呼ばれなかったアタシ！？ やだ、どうしょ！ こんなのはじめてだよ！？」

あれ、聞こえてねえの？

「おい」

「これだけでこんなに幸せなんだ」

「おいってばよ」

「ああ、ああ、どうしよどうしよ。も、どうしよ！？」

・・・・・・・・・・。

「このチョコリングいらないよな」

「ちょ！ いるに決まってんしょ！！？」

さすが、食い物にはしつかり反応。伊達じゃないな。

「あ、下和田くん。帰っちゃったんだ」

なんだか残念なようなホッとしたような複雑な表情でチョコリングを口に運ぶ朱音。

「おお、帰っちゃったよ。俺らもそろそろ出ねえか？」

「えー、まだモン・デ・リング食べてないんだけど」

「ああ、じゃ、それ食ってから出よう。俺も食いたい」

「うん」

とりあえずとっと食ってここ出よう。

なにか話すにしても結構な注目集めっちゃったみたいだしな・・・  
・・・。。落ち着かんぜ。

俺達はマスドから近くの自然公園へと移動した。

「んゝ、お腹満足ゝ」

幸せそうな声を出してんね。まあ、これから言うことを考えると  
なんか心苦しいが・・・。

「なあ」

「んゝ、なによ」

「ちょっと質問いいか？」

「?? わけ解んないのはパスね？」

「ああ・・・。。。。。。ちよつとわけが解んないのかも・・・多  
分」

「…………手っ取り早くお願い」

「おお、じゃ、聞くけど…………」

「ん」

「あ…………下和田にさ…………頭突きした記憶ある？」

「…………ふやいつ!!?」

お、すげえ声出たな今の。

「なにそれ！ 意味わかんないよ!?」

言って困惑した表情で俺の体を揺する朱音。ああ、ガクンガクンと俺の体が揺れて、目の前に朱音の顔と青空が交互に見えて、シェイク、シェイク、シェイク!?

「おう、ようっ!! やめろ！ 止めろ!? さっきのドーナツ、リバーズすんぞ!!?」

俺がそういうと朱音は俺の体のシェイクをやめてくれた。

「アタシ、知らないよ…………そんなこと、絶対にしないよ…………」

代わりに目に涙をため始めて、待て！ 泣くやつがありますか!?

「おい、俺なら笑え！ はい、ジャミラ！！」

俺は着ている服の襟首部分を引っ張ると自分の頭に被せる。

これは男の子が代々受け継ぐギャグの一つだと母ちゃんの弟（つまりは俺のおじさん）が教えてくれた一発芸だ。なんとこれだけで人は笑うらしい伝家の宝刀なのだという。まあ、ジャミラがなんのこともよく解らんが………実は人に使ったのはこれが初めて。ほら、でもこれで朱音の涙は笑いの涙に………。

「……………意味わかんない」

涙は引っ込んで冷めた瞳が向けられる。おいこらヨウジ（おじさん）！  
ちっとも笑わないじゃないか！！？

すごくごと服を元に戻す俺。襟首がちよっと伸びた気がする……………。

ま、泣くのは止められたから良いかな！！

俺はそう考える事にする。うん、そうする。

「と、そんなことはともかく！」

俺はビツと人差し指を朱音を挿して言う。

「あのな、多分だけど頭突きの事は、俺、検討ついでるのだ」

「なに！ ケントウってなに！！」

朱音がクワツと目を開いて俺の体を再びガクンガクンと

「て、落ち着けよ！ シェイクは嫌だ！ ちゃんと説明するから止めろ！？」

俺はバツと朱音から距離を取った。お互い、肩で息をする。まったく、俺たちは自分同士で何をやっとするんでしょうかね。

俺は軽く深呼吸をして説明を開始した。

「あの、下和田に頭突きしたのは俺だと思うのよ」

「?? どういうこと？」

ちんぷんかんぷんて顔してんね。

「正確には、おまえだった時の俺。かな？」

「.....」

「ほら、俺ら昨日はお互いに入れ替わってたみたいじゃん。途中までは」

「.....」

「てか、よく考えたら妙な話だよな。俺らすんなり受け入れてるけど、お互いに別々の個人だったんだよな。それが目覚ましたらいきなり兄弟.....て状態になって、それ全然不思議じゃなくて.....」



「・・・・・・・・」

「えーっと、いろいろあって動揺しまくって・・・・・・・・あいつに頭突きした。それがなんかおまえがやったことになってるみたい」

「なんでそんなことになってんのよ!!?」

朱音が吼えた。俺の耳元がキーンとする。

「いや、なんかお互いにあの時やった事が混じってるみたいで」

「そんなことアタシ聞いてない!!」

・・・・・・・・聞いてないって言われても

「なんで、あんた下和田くんに頭突きなんてしたのよ!!?」

「いや・・・・・・・・だから、動揺して」

「ウウツ」

あれ?

「これじゃアタシ。下和田くんに顔会わせられない・・・・・・・・よ」

肩が震えて

「ウワアアアン!!」

泣いた！ 目の前でもうひとりの俺が大声でワンワン泣き出した。

「お、おい・・・・・・・・」

「アタシ、アタシ」

ヤバイヤバイ、なんか知らんがとにかくヤバイ！！ なにかなにか泣き止む方法は・・・・・・・・ええい、ままよ！

「ほうら。はい、ジャミ——」

「うるさいっ！ 意味わかんない！！」

バキヤツとグーで殴られた。襟首部分を広げていた俺はグルンと一回転して地獄の苦しみを味わいながら上半身半脱ぎ常態で寝転ぶ変態と化した。

・・・・・・・・なにこれ？

このまま変態常態はまずい。俺はのっそりと起き上がり、涙目で啜り泣きながら睨む朱音を見た。

「・・・・・・・・あなさ」

俺は、怖いと思いながらも聞いてみた。

「おまえ、まさか下和田好き？」

ああ、極力忘れようとしていた。頭突きの原因もこれだった気がする。あまりのことに我慢できずに俺は奇行に走ったんだ。

できればここは杞憂で終わって欲しい。もうひとりの俺が、俺の親友に恋感情なんて……………。

朱音は鼻をすすって俯きがちに答えた。

「……………うん」

少し頬が赤い。つまりは……………そういうことか。

「マジ……………かあ」

俺は手を顔に当ててため息を吐いた。

もうひとりの俺。当然ながら顔もよくみたら同じなわけで、違いは男と女というところ。

そんな女の俺。朱音が好きなやつが、俺の親友下和田なんだ。

改めて聞いて、そう考えると、俺は物凄い違和感を感じつつ、もうひとりの俺を見つめた。

「なによ？」

あちらも俺を見る。

「アタシが、下和田くん好きなのおかしいの？」

おかしい？ いや、おかしくは無いのか？ 男と女なんだから問題ないんじゃないかな？

ああ、おかしくは無いんだけど・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8017h/>

---

アイツと俺は同じなアタシ！？

2010年10月9日23時10分発行